

ノ名詞節をとる構文の構造と機能

井島 正博

はじめに

ここで問題にしたいノは、従来「準体助詞」と呼ばれてきた。確かに歴史的には連体格助詞ノから派生して成立したと考えられ、このことは仁科・吉村(二〇〇五・三二)、信太(二〇〇六・三)などにおいて実証されている。とはいうものの、現代語共時態では、モノ・コト・ワケなどの形式名詞との共通性を中心に考察すべきであると考えられるため、原則として現代語共時態を中心に検討する本稿においては、「形式名詞」と呼ぶことにしたい。

形式名詞ノに関する問題には、いくつかの経路からたどり着いた。まず、ノダ文に関するこれまでの研究をたどってきた先に、この形式名詞ノが見出された。また、従来引用動詞の補文標識に関して、ト、コト(ガノ)、ノ(ガノ)のいずれをとるかに関して、現在でも最終的な結論には至って

いない。さらに、ノ以外の形式名詞、モノ・コト・ワケあるいはトコロ・ツモリなどに対して、最も自由な形としてノが挙げられてきた。

このように、最も興味深い複数の問題意識の中心にこの形式名詞ノが位置している。本稿では、ノ名詞節をとる構文の全体像を大づかみにとらえることを目指したい。

1 問題提起

ここで問題にしたいのは、用言連体形を承けるノである。これには(1) aのように事態(コト)をノで承けるもの、(1) bのように事物(モノ)をノで承けるもの、(1) cのように時間をノで承けるもの、(1) dのように手段(格成分)をノで承けるもの、(1) e・fのように補文内の事物をノで承けるもの、(1) gのように(主語を含まない)動詞、(1) hのように動詞句をノで承けるものなどさまざまである。

(1) a 近所で大きな火事が発生したのを目撃した。

b (金魚すくいをしていて)赤くて大きいのを捕まえた。

c 次郎が生まれたのは一九六〇年三月二十一日だ。

d 三郎が記名帳に名前を書いたのは毛筆でだ。

e 太郎は花子が柿の実をむいたのを食べた。

f 柿の実の熟したのを食べた。

g 花子は走るのが速い。

h 花子は運動会でスプーンに卵を載せながら走るのが得意だ。

(1) a のノ(ガ・ヲ)は補文標識と呼ばれ、(1) b のノは特に構文を作るものではないが文の構文要素となる名詞句を構成している。(1) c・d は分裂文という構文の主語を作るノであり、(1) e は主要部内在型関係節を作ると言われるノであり、(1) f はさらに同格格助詞のノを伴った名詞句を作るノである。そして(1) g・h は一種の二重主語文の第二の主語に用いられた名詞句を作るノである。

このように、用言連体形を承けるノにはさまざまな用法があり、これまではそれぞれ個別に論じられてきた。ここではこれらを統一的な観点で体系的に論じていきたい。

2 形式名詞ノの機能

以上見てきたさまざまな形式名詞ノの用法全体を通してみると、ノに何らかの意味を求めることは不毛であることがわかる。むしろ構文的に(述語句を名詞化する)機能を担っていると考えべきである。井島(二〇一・二・三)では、モノダ・コトダの諸用法を通観して、従来これらは形式名詞モノ・コトの意味すなわちおよそ(「事態性」)「物性」といったものからそれらの諸用法を説明しようとされてきたが、その議論は破綻しており、むしろモノ・コトが担っている構文的な機能から説明すべきであると論じた。形式名詞ノはそれらよりも意味的にはさらに抽象度が高く、構文的な機能によって諸用法が説明されるのも自然なことであると思われる。

さてそのように形式名詞ノの構文的な機能が(述語句を名詞化する)ことであるとすると、ノ名詞節全体は名詞の一般的な用法に従うことになる。名詞の分類にもさまざまな観点で考えられるが、統語的な機能に焦点を合わせた以下のような分類も考えられる。すなわち、命題全体に対応するコト名詞、命題を構成する項や時間・場所に対応するモノ名詞、述語の中でも動作を表わすウゴキ名詞、述語の中でも状態を表わすサマ名詞、時間的・空間的あるいはそれ以外の相対的な位置を表わす相対名詞、項同士あるいは命題同士などさまざまな統語単位間の関係を表わすハタラキ名詞といった分類で

ある。

コト名詞 事件・知らせ・ニュース

モノ名詞 太郎・花子・リンゴ・花

ウゴキ名詞 走り・写り・流れ・移動・飛行

サマ名詞 おとなしさ・美しさ・美

相対名詞 上・前・間・翌日・内

ハタラクイ名詞 関係・手段・対象・道具・原因

この類型は、必ずしも名詞を網羅的に分類することを意図したものでもないし、これまでにこのような分類が行われたことがないわけでもない。たとえば奥津（一九七四・九）では、以下に見る同一名詞連体をする名詞を除いた名詞（いわゆるソトの関係の連体）を「付加連体名詞」と呼び、それをさらに「同格連体名詞」（先に挙げた「コト名詞」と「相対名詞」（同名の名詞）とに分けている。奥津（一九七四・九）には、それ以外にも名詞の類型が挙げられているが、必ずしも分類の基準が一定していないように思われる。

さて先にも述べたように、これらの名詞は、統語的な機能な機能が異なると考えられるが、それは特にこれらの名詞に対する連体修飾のあり方に典型的に見られる。井島（二〇一二・三）で形式名詞コト・モノについて論じたように、コト名詞には、多くは同格連体、伝達動詞などを含む連体節の場合には同一名詞連体をし（コト名詞が伝達動作の項となるため）、モノ名詞には、同一名詞連体をする。また、相対名詞

には、言うまでもなく、相対的な位置関係を表わす相対連体をし、ハタラクイ名詞（すべてというわけではないが）原因―結果関係を表わす付加連体その他をする。ウゴキ名詞・サマ名詞に関しては、今の段階では留保しておきたい。

・コト名詞：同格連体また一部では同一名詞連体

(2) a 「K氏が殺された」事件

b 「 ϕ 朝刊に載っていた」事件

・モノ名詞：同一名詞連体

c 「昨日 ϕ 花子に本を貸してくれた」太郎

・相対名詞：相対連体

場所1 \uparrow ↓場所2

d 「火が燃えている」上

・ハタラクイ名詞：付加連体その他

結果 \uparrow ―原因

e 「電車が一時間遅れた」原因

次に、一般的に名詞は、文の中でどこに用いられるのかを考えてみたい。文の類型にもさまざまな立場があるが、統語的に文の述語部分に名詞（十断定助動詞）が用いられるか、形容詞が用いられるか、動詞が用いられるかによって、名詞述語文、形容詞述語文、動詞述語文と分ける分け方がある。これらの構文のうち、名詞が取りうる位置は、名詞述語文の

場合は主語か述語、形容詞述語文の場合は主語か述語の一部(二重主語文)、動詞述語文の場合は主語も含めた格要素である。この名詞部分に、ノ名詞節が代入されることによって、さまざまな構文が成立すると考えられる。

・名詞述語文の主語・述語

(3) a 太郎は学生だ。(主語・述語)

・形容詞述語文の主語

b この花は美しい。

・ある種の二重主語文の第二の主語

c この車は走りが速い。

・動詞の格要素

d 太郎が花子に手紙を書いた。(主格・相手格・目的格)

e 日曜日に研究室に行った。(時格・場所格)

さらに、これらの文の種類と、用いられる名詞の種類とは、相関関係が見られる。名詞述語文の主語・述語には、主としてコト名詞・モノ名詞が、形容詞述語文の主語には、コト名詞・モノ名詞・ウゴキ名詞・サマ名詞が、二重主語の第二の主語には、ウゴキ名詞が、動詞述語文の中でも一般動詞の格要素には、モノ名詞・ウゴキ名詞・サマ名詞・ハタラク名詞が、引用動詞の(引用される)格要素には、コト名詞が用いられるようである。

・名詞述語文の主語：コト名詞・モノ名詞

・名詞述語文の述語：コト名詞・モノ名詞

・形容詞述語文の主語：コト名詞・モノ名詞・ウゴキ名詞
・サマ名詞

・二重主語文の第二の主語：ウゴキ名詞

・一般動詞の格要素：モノ名詞・ウゴキ名詞・サマ名詞・ハタラク名詞

ハタラク名詞

・引用動詞の(引用される)格要素：コト名詞

さて、本稿は、ノ名詞節がそれぞれの文類型の名詞の位置に代入されて成立した構文を体系的に見渡すことが主目的である。もう少し後で論じるが、井島(二〇二二・三)で見たように、コト名詞節が原則として同格連体、モノ名詞節が同一名詞連体をするのに対して、ノ名詞節は同格連体も同一名詞連体もどちらもとることができる。言い換えれば、ノ名詞節はコト名詞としてもモノ名詞としても用いられることである。すなわち、名詞述語文の主語・述語(コト名詞・モノ名詞)、形容詞述語文の主語(コト名詞・モノ名詞)、一般動詞の格要素(モノ名詞)、引用動詞の格要素(コト名詞)として用いられることになる。

ここで、二重主語文の第二の主語に用いられるウゴキ名詞について考えたい。ウゴキ名詞も、(4) a'・b'のように動詞十ノを用いることができる。ただし、(4) a'・a'で「走り」と「走る」を置き換えることができないように、両形式は同義ではない。直感的には、前者は「この車は「走りが早い」」のように「走りが早い」全体で述語句を構成しているのに対し、

後者は「敢えて対比的に言えば」「太郎が(は) 走るのが」
速い」のように、「太郎が(は) 走るのが」全体でむしろ主
語節を構成しているように思われる。

(4) a この車は走りが速い。

b この川は流れが緩やかだ。

a' 太郎は走るのが速い。

b' 花子は退社するのが時間通りだ。

このことは、一般的な属性を表わす場合には違いが目立た
ないが、一回的な出来事を表わす場合には、後者は自然だが、
前者は不自然になることから支持される。

(5) a ??この車は先日のレースで走りが速かった。

b 太郎は先日のレースで走るのが速かった。

同様に、後者は単に動詞を名詞化するものばかりでなく、
さまざまな副詞句も含めた動詞句全体をノで名詞化すること
ができることもこのことを支持する。

(6) a 花子は「運動会でスプーンに卵をのせながら走る」の
が得意だ。

b 太郎は「何も見ないで日本地図が書ける」のが自慢だ。

それはさておき、この連体のあり方は、同格連体に近いも
のではあるが、特に主語が連体句の中に含まれないという点
において、これまでのどの類型とも一致しない。このように、
(主語を含まない) 述語句がノに連体修飾することを「述語
同格連体」と呼ぶことにしたい。

ここで、ウゴキ名詞をとるものに、他に形容詞述語文の主
語と一般動詞の格要素とがあり、実際これらにもノ名詞句(こ
こでは主語がないので「節」でなく「句」と呼んでおく)用
いることができる。本来であれば、これらも含めて考察を進
めるべきであろうが、ここでは可能であることを確認するに
留める。

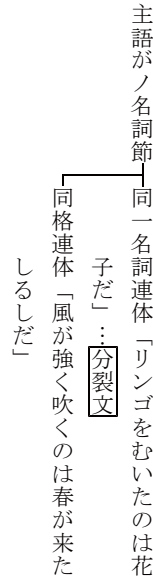
(7) a 「音を立てずにこの場から立ち去る」のは困難だ。

b 太郎は「一筆で人の顔を描く」のを練習している。

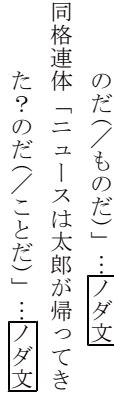
さて、ここまでの考察から、ノ名詞節(一部ノ名詞句)を
とる文類型の中に、従来指摘されてきたさまざま構文を位置
付けてみたい。まず、名詞述語文の主語がノ名詞節である構
文が分裂文であり、述語がノ名詞節である構文はノダ文であ
ると言えそうである。ただ、名詞述語文の述語名詞にノ名詞
節を用いるのは許容度がかなり低い、これは確立したノダ
文との混同を避けるため、強い抵抗があるからだと考えてお
きたい。次に形容詞述語文の主語にもノ名詞節が用いられる
が、これは特別な構文を構成しているわけではない。形容詞
述語文の述語は、言うまでもなく形容詞(および形容動詞)
なのであるが、それが複合的な形をとり、「寝るのが早い」「仕
事をするのが雑だ」のように中にノ名詞句を含み、文全体と
して二重主語文となるものがある。さらに動詞述語文の場合、
一般の動詞の格要素としてノ名詞節が用いられることも多い
が、引用動詞の格要素として用いられるものは、従来補文標

識と呼ばれてきた。さらに、形態的にはコト名詞節のように見えて、意味的にはモノ名詞節として働く主要部内在型関係節もここに位置付けられる。

・名詞述語文



述語がノ名詞節

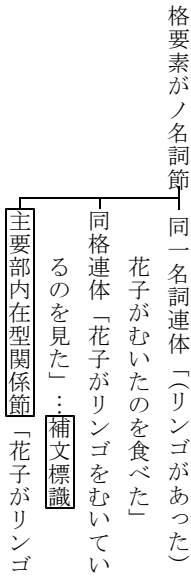


・形容詞述語文

主語がノ名詞節—同格連体「花子がいなくなったのは寂しい」

述語の一部がノ名詞句—述語同格連体「太郎は走るのが速い」：二重主語文

・動詞述語文



をむいたのを食べた」

若干注釈を加えれば、述語がノ名詞節の名詞述語文は、同一名詞連体の場合も同格連体の場合も、いずれも据わりが悪い。一方で前者にモノ、後者にコトをあてればそれほど自然ではない。また、これを倒置して主語をノ名詞節にしたものは、許容度が上がる。

- (8) a 釘を打つのはカナヅチだ。
- b 太郎が帰ってきたのがニュースだ。

このことは、文末にノ名詞節+ダという形が来ることは、ノダ文との対立上、抑制されるのではないかと考えられる。以下では、各構文に関して若干の考察を加えていきたい。

3 分裂文

一般に、分裂文とは以下のようなものであると了解されている。すなわち、aのような特殊ではない文型では、事柄的な意味は充分に表わすことができても、どの部分が話し手も聞き手もすでに知っていることなのか(前提)、どの部分が聞き手が知らないから話し手が教えていることなのか(焦点)が明らかではない。そこで「名詞節」ノハ「名詞など」ダという構文を用いて、主語部分が前提で、述語部分が焦点であることを明示することができる。これが分裂文の機能で

あると論じられる。

(9) a 太郎が花子を愛している。

b 花子を愛しているのは太郎だ。

この特徴を用いて、たとえば否定文の焦点がどこにあるかなどをチェックするテストとして用いられるなど、分裂文は前提・焦点を明示するための構文であるという了解が一般的であるように思われる。

ではそもそもこの構文はどのようにして成立したと考えられるだろうか。ここには同一名詞連体が関与していると思われる。すなわち、まず「太郎が花子を愛している」という命題中の、項「太郎」が文末に移動して、「 ϕ 花子を愛している太郎」という同一名詞連体を用いた名詞節を構成する(10) a)。そして文末の「太郎」が形式名詞ノで代替され、それと「太郎」とが同一物であることを表わす主述関係で結ばれた構文として成立したものが分裂文であると了解される。

(10) a 「 ϕ 花子を愛している」太郎

b 「 ϕ 花子を愛している」の \parallel 太郎

以上のように、分裂文が統語的に成立するありさまは了解できるのであるが、分裂文が先のように「前提」ノハ「焦点」ダという情報構造を持つことに関しては、もう一つ別の仕組みが複合していると考えなければならない。すなわち、同じ

名詞述語文でも、AハBダであれば、Aが旧情報(\parallel 前提・主題)でありBが新情報(\parallel 焦点)となるが、AガBダであれば、Aは新情報(\parallel 前提)でありBが旧情報(\parallel 前提)となるという、ハ・ガの情報構造上の働きを勘案しなければならない。

(11) A あなたはどなたですか。
旧情報 新情報

B a 私は山田です。

b *私が山田です。

(12) A 山田さんはどなたですか。
B a *私は山田です。

新情報 旧情報

b 私が山田です。

旧情報 新情報

c cf 山田は私です。

この両者を組み合わせると、主語のノハ節で前提(\parallel 旧情報)を表わし、述語名詞(など)で焦点(\parallel 新情報)を表わす、いわゆる分裂文の構造を示すことができる。

旧情報 \parallel 前提 新情報 \parallel 焦点

(13) 「花子を愛している」のは太郎だ。

他方で、これまで主語にガが用いられるガ分裂文についても論じられてきた。天野(一九九五・一、一二)によってこの問題が提起され、佐藤(一九九九・三)、加藤(二〇〇九

・三) などによって批判的な検討が行われてきている。すなわち、(14) a のようなガ分裂文は、(14) b のようなハ分裂文とそれほど大きな違いがない(場合がある)ものであり、主語部分が前提、述語部分が焦点と解釈される場合もあり、逆に主語部分が焦点、述語部分が前提と解釈される場合もある、というような議論であったように見受けられる。

(14) a 特におすすめのながこれです。

b 特におすすめのなはこれです。

それに対して、井島(一九九八・三二)では、焦点にもその内容そのものを聞き手が知らない「実質的新情報」と、複数の選択肢の中で当該ものがどれであるかを聞き手が知らない「選択的新情報」とを区別する必要を論じた。そして後者は、当該対象そのものは旧情報であってもよい。この区別を用いると、どうやらガ分裂文が用いられるのは、選択的新情報であることがわかる。すなわち、何らかのキャンペーンの中であれば、「特におすすめのな」のほか、「そこそこおすすめのな」、「時代遅れのもの」などがあるのは当然のことである。その中で「特におすすめのな」を選んだと考えれば、選択的新情報であるが、前もって想定されている選択肢であると考れば旧情報と了解される。

詳細な議論はここでは避けるが、ハ分裂文は旧情報―新情報という語順に即しているために分裂文として典型的なものと了解されているが、ガ分裂文はそれと反しているために特

殊な表現とならざるをえない。それについてはさまざまな議論が展開されているが、この点に関してはここでは追求しないことにしたい。

ところで、近藤(一九八九・三〇〇・二二)では、中古語の分裂文に関して論じている中で、奥津(一九七四・九)による、補文が名詞述語の場合、全体でモノの意味となる同一名詞連体ではノが用いられるが、全体でコトの意味となる同格連体ではノが用いられるという分析を分裂文に適用すると、ナノが用いられることから、分裂文の主語は同格連体であるという。

(15) a 部品がすべてスイス製なのは、この時計だけだ。

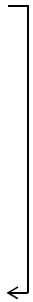
a' ? 部品がすべてスイス製のは、この時計だけだ。

b 作者が柿本人麻呂なのは、三三番の歌だ。

b' ? 作者が柿本人麻呂のは、三三番の歌だ。

しかるに、これらはこの時計の部品がすべてスイス製だ(三三番の歌の作者が柿本人麻呂だ)という命題の、「この時計」・「三三番の歌」が文末に移動して同一名詞連体を構成し、さらにそれらの名詞がノで代替されたものと解釈できる。その点、命題の文末がダの連体形ナになるのは自然と言える。その点、(16) c のような形容動詞も事情は同じである。

(16) a 「φ部品がすべてスイス製な」のは、この時計だけだ。



(16) c のような形容動詞も事情は同じである。

b 「ø作者が柿本人麻呂な」のは、三三番の歌だ。

c 「øお姉さんがきれいな」のは、太郎だ。

また、これらの主語のノ名詞節に対する、述語名詞が「この時計」・「三三番の歌」であることからすると、主語のノ名詞節は、モノ名詞に相当することになる。このこともノ名詞節が同一名詞連体であることを支持している。

それはともあれ、分裂文の場合、述語は名詞だけでも、名詞十格助詞でもよいのに対して、連体修飾を承けるのが普通名詞（たとえば「人」）であれば、名詞はよいが、名詞十格助詞は不自然であるという事実は存在する。すなわち、名詞十格助詞は言うまでもなく名詞ではないから、分裂文のノ名詞節は、「同一名詞連体」ではないということになる。

(17) a 太郎がけんかしたのは（次郎／次郎と）だ。

b 太郎がけんかした人は（次郎／*次郎と）だ。

しかるに、ここで名詞を「人」から「相手」に変えると、名詞十格助詞の許容度はある程度上がらないだろうか。また、分裂文の述語部分が原因／理由を表わすカラダの場合、主語をノ名詞節から「理由」で結ぶ名詞節に変えることも可能である。

(18)(17) c 太郎がけんかした相手は（次郎／？次郎と）だ。

a 庭が濡れているのは昨夜雨が降ったからだ。

b 庭が濡れている理由は昨夜雨が降ったからだ。

すなわち、主語が「人」というモノ名詞で結ばれていれば、述語名詞もモノ名詞でなければならぬが、主語が「相手」や「理由」というハタラク名詞で結ばれていれば、述語も「と」や「くから」などの格表現、接続表現を用いることができるということなのではないだろうか。

これらのことにそれなりの妥当性があるとすれば、確かに分裂文のノ名詞節が「同一名詞連体」で構成されているということは正確ではないことになる。むしろ格要素、接続要素も含めた「同一要素連体」とでも言うべきかもしれない。とはいっても、これらには補文中の何らかの要素が文末に移動してノで代替されたという了解は共通しており、直感にも即している。純粹な同一名詞連体の規定には当てはまらなければ、同格連体であるという論理は、逆に同格連体であると論じることでどのように自然な説明ができるのかを示さなければ説得力に欠けることになる。

近藤（一九八九・三〇〇〇・二）に示された石垣法則は、現代語とは別に説明を試みる必要があると思われるが、中古語では分裂文の主語名詞には、ハもしくはヤしか用いられないという指摘は示唆的である。ハもヤも主題、すなわち旧情報を表わす助詞であると言われてきた。すなわち、現代語ではハ分裂文の他にガ分裂文が存在し、その位置づけが難しいが、どうやらガ分裂文は歴史的に後発的なものであり、

複雑な働きを担うことになったという経緯を推測することができる。

4 ノダ文

ノダ文に関しては、井島(二〇一〇・三、一一・三、一二・三、一三・三、一四・三)などで再三論じてきたので、ここではあまり立ち入った議論は避けたい。さて、井島(二〇一二・三)において、モノダ文・コトダ文に関しては、その成立に前者は同一名詞連体、後者は同格連体が関わっているという議論をした。すなわちモノダ文は、名詞述語文の述語名詞に同一名詞連体をしたモノが代入され、それが異分析によって、モノダが助動詞的に切り離され、命題に付加されるように了解されて成立したものであると論じた。

(19) a カナヅチは「釘を打つもの」だ。

b 「カナヅチは釘を打つ」ものだ。

他方で、コトダ文は、同じように名詞述語文の述語名詞に同格連体をしたコトが代入され、主語部分が削除され、コトダが助動詞的に働くようになることによって成立したと考えられる。

(20) a 「私が日頃心がけていること」は「お年寄りには親切にすること」だ。

b 「お年寄りには親切にする」ことだ。

このような統語的な構造から、モノダ文・コトダ文のさまざまな用法が説明できることが示されるが、ノには同一名詞連体も同格連体もいずれも可能であることからすると、モノダ文の成立の仕方、コトダ文の成立の仕方、いずれも可能であったということになりそうである。

しかるに、ノ名詞節は、モノを表わす場合は辛うじて述語名詞に用いることができるが、コトを表わすものは用いることができない。

(21) a この服は「去年花子に買ってもらった」(？の／もの)だ。

b 今年一番のニュースは「冬が数十年ぶりに寒かった」(＊の／こと)だ。

この主語名詞と述語名詞とを入れ替えると、ノ名詞節はいずれも自然になる。もつとも、モノを表わすノ名詞節が主語となったものは分裂文となるので、自然となるのも当然ではあるが。

(22) a 「去年花子に買ってもらった」(の／もの)がこの服だ。

b 「冬が数十年ぶりに寒かった」(の／こと)が今年一番のニュースだ。

要は、先の(21) a・bがどうして許容度が低くなるかが問題なのであるが、これはノダ文が、モノダ文・コトダ文以上に文法化が進み、ノ名詞節+ダが持っている意味機能と完全に

断絶してしまった段階で、ノダ文と紛らわしいノ名詞節＋ダを述語とする名詞述語文を抑圧するようになった、といった経緯が考えられる。この点に関しては再考を期したい。

要するに、ノダ文の成立に関しては、形式名詞ノに対する同一名詞連体も、同格連体も、どちらの可能性もありうるが、それは中古語の連体ナリ文がその両者のどちらでもありえたことを受け継いでいるためであると考えられる。

5 ある種の二重主語文の第二の主語

第2節でも見たように、ある種の二重主語文の第二の主語に、ノ名詞句（主語がないのでこの節では名詞“句”と呼ぶ）が用いられることがあるが、ここには主語を持たない（副詞句を伴う）動詞がノによって名詞化されたものであるので、いわば不完全な同格連体といった意味で「述語同格連体」と呼んだ。

ここで、(23) a～eの二重主語文は、(24) a～eのような形容詞（形容動詞）の連用形を伴う動詞文に書き換えることができる。

- (23) a 太郎は走るのが速い。
b 冬は日が暮れるのが早い。
c 山田は東京に到着するのが遅かった。
d 花子は子供をあやすのが上手だ。

e カレイとヒラメとは見分けるのが簡単だ。
f あの先生は生徒に教えるのが大雑把だ。

- (24) a 太郎は速く走る。

b 冬は早く日が暮れる。

c 山田は遅く東京に到着した。

d 花子は上手に子供をあやす。

e カレイとヒラメとは簡単に見分けられる。

f あの先生は大雑把に生徒に教える。

一方で、動詞文を二重主語文にすることができないものもある。

- (25) a 花子はぞうきを固く絞った。

b 太郎は広く支持者を募った。

c 次郎は熱く思いを語った。

- (26) a *花子はぞうきを絞るのが固かった。

b *太郎は支持者を募るのが広かった。

c *次郎は思いを語るのが熱かった。

これらの違いはどこにあるのだろうか。恐らく形容詞の修飾先、すなわち形容詞述語文であればその主語が動作述語（ウゴキ）であることなのではないだろうか。すなわち「早い・速い／遅い」「上手だ」「簡単だ」「大雑把だ」は動作に関して用いられるが、「固い」「広い」「熱い」は原則としてモノに関して用いられる。

6 動詞述語文の格要素

形式名詞ノの統語的機能、特に連体修飾のあり方については、モノが同一名詞連体、コトが主として同格連体（ある場合には同一名詞連体）であったのと比べると、同一名詞連体も同格連体もどちらも可能である点で、より汎用的である。すなわち、(27) a は同一名詞連体、(27) b は同格連体、(27) c は主要部内在型関係節となる。

(27) a 母がリンゴを買ってきた。花子がむいたのを太郎が食べた。

b 花子がリンゴをむいたのを太郎が見ていた。

c 花子がリンゴをむいたのを太郎が食べた。

ノに対する連体のあり方を、同一名詞連体と解釈するといふことはどういふことだろうか。同一名詞連体の場合、通常であれば、(28) a' の「リンゴ」のように、補文中にあるべき普通名詞が連体修飾を承けるはずである。しかるに (28) a のように形式名詞ノが連体修飾を承けるということは、前後の文脈によってノが表わす実質は了解されているはずである（ここでは前文「母がリンゴを買ってきた。」から「リンゴ」と了解される）。そのような場合に、実質的な意味を持つ普通名詞はノによって代替されると考えられる。

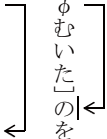
次にノに対する連体のあり方を、同格連体と解釈するといふことはどういふことだろうか。同格連体の場合、こちらも

通常であれば、(28) b' の「様子」のように、補文のカテゴリを表わす普通名詞が連体修飾を承けるはずである。ここで (28) b' のように形式名詞ノが連体修飾を承けるということは、特に主文述語、この場合「見る」が対象として要求するものが、モノあるいは状況・場面（もしくは「様子」）などのコトであることが自明であるためであると考えられる。これが補文標識と言われているノ（ガ・ヲ）の実態であると考えられる。

さらに、ノには、トコロにも見られる、いわゆる「主要部内在型関係節」をつくる用法が見出される。この特殊な用法は、これまでに見てきた同一名詞連体用法と同格連体用法との双方が可能であるところから発生した用法であると考えられる。同一名詞連体は補文中には当該名詞は存在せず、被修飾名詞の位置に現われるのに対して、主要部内在型関係節はむしろ補文中に当該名詞が残存し、被修飾名詞の位置にノが現われるという点では逆転しているのではあるが、補文の構成要素と被修飾名詞との間で交代が見出されるという点では共通している。他方で同格連体は主文動詞の対象に関する状況やそれに関わる場面を表わしているようである。

(28) a 「花子がむいた」のを太郎が食べた。

a' 「花子がむいた」リンゴを太郎が食べた。



b 「花子がリンゴをむいた」のを太郎が見ていた。

b' 「花子がリンゴをむいた」様子を太郎が見ていた。

c 「花子がリンゴをむいた」のを太郎が食べた。

c' 「花子がリンゴをむいた」のを太郎が食べた。

このような事情が、補文を承ける形式名詞ノには見出されるために、一九七〇年代以降、生成文法の世界で、主要部内在型関係節の成立根拠として、名詞節と解釈する説と、副詞節と解釈する説とが対立することになったのであるうと考えられる。

7 一般動詞の格要素―名詞節

一般動詞の格要素には、基本的にモノ名詞が用いられる。ここにノ名詞節が代入される場合、その連体のあり方は同一名詞連体となることになる。その際、先にも論じたように、前後の文脈でノはどのようなモノ名詞の代替であるかが示されていなければならない。そして多くの場合、(29) a ~ c のように、連体節は複数の中から一つを特定する条件が示される。

(29) a 三人の男₁がやってきた。メガネを掛けたのが挨拶した。

b ごちそうが並んでいた。一番高そうなのを食べた。

c 電話が一斉に鳴りだした。最初に鳴ったの₁に出た。

よそ同義である。

(30) a メガネを掛けた男が挨拶した。

b 一番高そうなごちそうを食べた。

c 最初に鳴った電話に出た。

8 引用動詞の格要素―補文標識

引用動詞の補文であることを表わす形式として、ト・ノ(ガ／ヲ)・コト(ガ／ヲ)があると**言**われる。

(31) a 吉野では桜が満開に咲き誇っていると聞いた。

b 吉野で桜が満開に咲き誇っているの₁を見た。

c 吉野で桜が満開に咲き誇っていることをスマホで伝え**た**。

このことは、恐らく久野(一九七三・六)で論じられたことから通念化したと思われる。すなわち、ト・ノ(ガ／ヲ)・コト(ガ／ヲ)は引用動詞の補文であることを表わすという点において共通の文法機能を持つものであり、総じて「補文標識」と呼ばれるようになった。そしてその後は、そのような土俵の上で、それぞれにはどのような使い分けがあるのかに関して議論が戦わされ、多くの研究が公にされたが、大

まかな使い分けは見出されるものの、管見では未だ最終的な結論には至っていない。とは言うものの、本稿では、これらの使い分けに深入りすることは避けることにしたい。

ここで立ち止まって考えたいことは、英語学に触発された純語論的問題関心からは、確かに補文標識としてト・ノ(ガ/ヲ)・コト(ガ/ヲ)を比較することになるだろうが、もっと日本語のあり方に即して考えれば、品詞としての形式名詞ノを用いたさまざまな構文、ノダ文・分裂文・主要部内在型関係節などに並ぶものとしていわゆる「補文標識」ノ(ガ/ヲ)を位置付けることになるだろう。

このような観点から改めて見直してみると、くノ(ガ/ヲ)はノ名詞節に格助詞が下接したものであることになり、ノ名詞節は名詞一般と同じ構文的な位置付けとなる(32) a・b・c)。

(32) a 吉野で桜が満開に咲き誇っているのを見た。(11) b)

b 吉野で桜が満開に咲き誇っている景色を見た。

c 吉野で満開に咲き誇っている桜を見た。

ただ、他の動詞の格要素と異なる点は、このノが、(32) bの「景色」のようなコト名詞に置き換えられるように、ノ名詞節全体が事態(コト)を表わすという点である。しかも視覚や聴覚などでとらえられた事態であって、文字や発話で了解された言語的事態ではない。これらのことが、ト・コト(ガ/ヲ)との使い分けに反映しているものと考えられるが、こ

の点に関しては稿を改めて考察したい。

ここで、(32) aに注目すれば、「桜が満開に咲き誇っている」は同格連体をしたコト名詞節とも考えられる一方、主要部内在型関係節、すなわち意味的には「満開に咲き誇っている桜」とほぼ同等のモノ名詞句と解釈することも可能である。

9 一般動詞の格要素―主要部内在型関係節

主要部内在型関係節の議論は、四十年近く前に、生成文法の枠組で議論が始まり、現在に至るまで議論が絶えない。もともと、この現象そのものは、石垣(一九五五・一一)などによってつとに指摘されていたものであった。

さて、生成文法における議論は、Kuroda(一九七六/七七・*)によって、まず主要部内在型関係節は名詞句であると論じられ、名詞句説はさまざまなヴァリエーションはあるものの多くの研究者から支持された。それに対して三原(一九四・一二)は副詞句説を主張した。

すなわち、名詞句説は(33) aのように「駅で酔っ払いが騒いでいたの」は節の形をしているが主節「警官に捕まった」の主語の名詞として働いていると考えるのに対して、副詞句説は(33) bのように「駅で酔っ払いが騒いでいたの」は主節「酔っ払いが」警官に捕まった」が起こった状況を表わしており、主節の名詞は潜在化しているという了解である。

(33) a 「車で酔っ払いが騒いでいたの」Pro」が警官に捕まった。

b 「車で酔っ払いが騒いでいたの」Adv」Pro」が警官に捕まった」VP。

このように、生成文法の枠組で議論しようとすると、名詞句説か副詞句説かの二者択一が迫られることになる。すなわち主要部内在型関係節のような、文の形とそれが表わす意味の間に食い違いがある表現は、生成文法にとつては、右か左かをはっきりさせなければ「許しがたい」ものにとらえられることになるのだろう。しかるに、主要部内在型関係節は実際には両者の側面を併せ持ったものではないだろうか。

近年は、主要部内在型関係節が名詞句か副詞句かという議論から離れて、それがどのような機能を担っているか、歴史的にどうしてそのような構文が成立したのか、などに問題がシフトしてきたように見受けられる。

さて、(34) a・bは補節は同一であるが、主文(動詞)が異なるために、(34) aの補節は主要部内在型関係節、(34) bの補節はもつと一般的な引用節に振り分けられる。

(34) a 「花子が枝から桃をもいだ」のを太郎が食べた。

b 「花子が枝から桃をもいだ」のを太郎が見ていた。

このことは、補節だけを見ていたのでは、それがどのような補節であるかを明らかにすることはできず、主節との関係の中でその位置づけが決まると云うことになる。言い換えられ

ば、(35) aについては、動詞「食べる」は対象にモノを要求することから、補節をモノと解釈することになるのに対し、(35) bについては、動詞「見る」は対象にコトを要求することから、補節をコトと解釈することになるのではなからうか。

(35) a 「花子が枝から桃をもいだ」のを太郎が「モノ」ヲ食べた。

b 「花子が枝から桃をもいだ」のを太郎が「コト」ヲ見ていた。

いわば、逆算によって要求された統語構造ということになりはしないだろうか。補節はあくまで何らかの事態を描写しているに過ぎない。それが主節の要求により、主要部内在型関係節となったり、引用節となったりするのではないだろうか。そして主要部内在型関係節の場合には、補節の中から主節が要求するモノを探し出して、それを主節の格要素として解釈するに過ぎないのではないだろうか。このように、結果的には補節は主節の要求するモノを指し示すとともに、主節の起こった状況を表わす働きをしていることになる。

そのような観点から改めて主要部内在型関係節を考え直してみると、そもそも「主要部」すなわち主節の格要素となる

モノを表わす名詞が補節の中にない場合、すなわち統語的に「主要部内在型」と言うことができない場合もあるということになる。野田（一九九八・九）には、主要部、すなわち主節の格要素となるものが補節の中に存在しない例を以下のよう挙げる。

(36) a 「ミネラルウォーターを冷蔵庫で凍らせたの」をアイスコーヒーに浮かべた。

b 「二階の風呂場の浴槽があふれたの」が下まで漏れてきた。

c 「今朝顔を刺つたの」が、夕方にはまた伸びてきた。

d 「土を二メートルほど掘つたの」がを上から覗き込んだ。

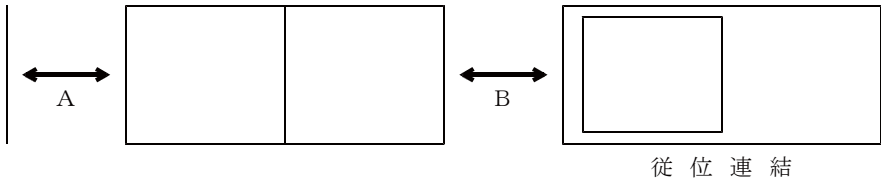
e 「宴会で足が出たの」を幹事が立て替えた。

f 「インク壺を机の上に倒してしまったの」を拭き取つた。

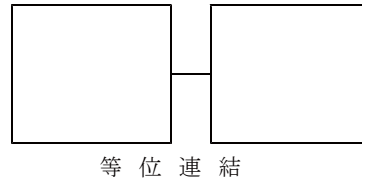
それぞれ主節の格要素としては、(36) a 「氷」、(36) b 「水」、(36) c 「髭」、(36) d 「穴」、(36) e 「赤字、不足」、(36) f 「インク」が考えられるが、これらは補節の中には見出されない。ということ、主要部は単純に補節の中に見出されるとは言えないということになる。より正確に言えば、主節が要求する主要部は、補節の中の項、あるいは補節から類推される「顕著な salient」要素である、と言わざるをえないこととなり、統語論というよりは語用論の領域に属する問題となる。

ここで、動詞によって (36) a 「浴槽／水があふれる」、(36) b 「顔／髭を剃る」、(36) c 「土／穴を掘る」のように二重に異なった項（およそ場所と対象、完成品と対象）をとることができることが関わっているという可能性も否定できないが、明示されていない要素が主要部となるなどということは一般化できそうもないし、(36) d、e はこの議論には乗らない。

また、主要部内在型関係節のように形態と意味とにくい違いのある、いわば不安定な構文がどうして存在するかについては、坪本（一九九四・七、九五・三、九九・一、二〇〇三・二、〇四・二、〇五・二、〇七・一、一一・一、一四・一、一四・二、一五・三）の一連の研究によって、および以下のように論じられる。以前補文標識としてのノ（ヲ・ガ）の議論の中で、他の補文標識トやコト（ガ・ヲ）との違いとして、補文と主文とが同一時間・同一場所といった（近接性）を表わすと論じられたことは、そのまま主要部内在型関係節の議論にも通用すると論じる。そのうえで、主要部内在型関係節が、副詞節としても、名詞節としても解釈可能であることに關して、主要部内在型関係節は、単に二つの節が結びついて一つの文であることを表わすことがその機能であり（中央の図）、相互がいわば対等の形で解釈されるのが副詞節としての解釈であり（左の図）、関係節が主節に包含された形で解釈されるのは名詞節としての解釈である（右の図）と論じる（図表一）。



図表一



大いに傾聴に値する議論であるが、ここから汲み取ることができるのは、歴史的にも準体構文にさかのぼるこの主要部内在型関係節は、単に二つの節を並べて結びつけるだけのアルカイックな文構造であり、その意味解釈（主文に対して名詞節となるのか補節になるのかなど）は関係節と主節との意味関係に任されているということである。

言い換えるならば、生成文法で、主要部内在型関係節は副詞節なのか名詞節なのか最大の問題点として議論されたが、どうやら主要部内在型関係節は本来副詞節とも名詞節とも限られたものではなく、単に二つの節を結びつけたに過ぎない構文であり、両者の意味的な関係は意味解釈に任されたものであったと考える方が自然であるようである。

ただ、それならば結びつけられた二つの節は、何の関係も

ないものでよかったのかと言えば、それはそうではなく、そこに空間的・時間的な〈隣接性〉がなければならなかった、というのが坪評説ということになるだろう。

ここで〈近接性〉と言われているのは、主文の動詞が知覚動詞の場合は、従属文の内容は当該の知覚動詞の主語が直接経験したことであることを意味しており、主文の動詞がそれ以外（「つかまえる」「邪魔する」など）の場合は、当該の事態を何らかの主語（表現上は明示されないことが多い）が直接経験した事態であることを意味していると考えられる。

であるとすれば、ノ節の事態は、明示的であるにせよ潜在的であるにせよ、何らかの経験主体が直接経験した事態を表わすことになる。これがノダ文にも拡張されると、ノダ文にはその内容を判断する主体は明示されないが、いずれかの主体が判断した内容であると示す表現となると考えられる。

主要部内在型関係節に関しては考察すべきことは他にも多々あると思われるが、本稿におけるとらえ方をおおよそ素描した。

おわりに

以前にノダ文に関しては、かなり踏み込んだ議論をしたが、そこから形式名詞ノを用いた構文全体を見渡すところのような体系が浮かび上がるかに関心が移ってきた。とはいっても、

ノ名詞節を用いた構文はいずれもそれぞれで一つの研究領域をなすような大きなテーマばかりである。ここでは一つ一つの構文にあまり深入りすることなく、全体像を浮かび上がらせることに意を尽くしたつもりである。それぞれの構文に関しては、さらに分析を進めたい。

参考文献

- 石垣 謙二（一九五五・一一）『助詞の歴史的研究』岩波書店
松原 純一（一九六三・一〇）『形式名詞の「こと」の構文上のはたらき』『国語研究室』第二号（東京大学）
牧内 勝（一九六七・二）『日本語の名詞的表現——『の』を含む構文を中心として——（第54回大会研究発表報告要旨）』『言語研究』第五十号
佐治 圭三（一九六九・六）『「こと」と『の』——形式名詞と準体助詞〈その一〉——』『日本語・日本文化』第一号 pp.1-17（大阪外国語大学）
ファラシイ、ロバート A.（一九七一・一一）『疑似分裂文の深層疑問について』『英語学』第六号
久野 暉（一九七三・六）『日本文法研究』大修館書店
Nakau, Minoru（一九七三・*）『Sentential Complementation in Japanese』, *Kaikasya*
Harada, Shin-ichi（一九七三・*）『Couter Equi NP Deletion』, 『Annual

奥津敬一郎 (一九七四・九) 『生成日本文法論—名詞句の構造—』大
修館書店

中村 芳子 (一九七五・一一) 『S』と『V』について 『日本語
教育研究』第十二号 pp.26-34 (言語文化研究所)

石沢 弘子 (一九七六・三) 『日本語教育から』 『V』と『S』 『研
修』第八十一号

信太 知子 (一九七六・三) 『準体助詞『の』の活用語承接について
—連体形準体法の消滅との関連—』 『立正女子大国文』第
五号

Kunoda, Shige-Yuki (一九七六／七七・*) 'Pivot-independent Relative
Clauses in Japanese' II, "Papers in Japanese Linguistics" 4

友田英津子 (一九七九・三) 『V』と『S』の意味上の違いについ
ての覚え書き』 『武蔵野女子大学紀要』第十四号

友田英津子 (一九七九・*) 『名詞化要素』と『こと』の選択と
視点』 『武蔵野英米文学』第十二号 (武蔵野大学)

富田 博文 (一九八〇・三) 『日本語補文構造考—『V』と『S』
について—』 『関東学院大学文学部紀要』第二十九号

杉村 博文 (一九八〇・九) 『の』の『だ』と『的』 『是……的』 『大
阪外国語大学学報』第四十九号 (大阪外国語大学)

近藤 芳美 (一九八〇・一〇) 『言語時評』: 『に』と『の』と『言
語生活』第三百四十六号

近藤 泰弘 (一九八一・五) 『日本語の準体構造について』 『国語と国
文学』第五十八巻第五号 pp.18-31

星野 起美 (一九八四・一二) 『補文標識『こと』『の』の分析とその
問題点』 『日本文学誌要』第三十一号 (政法大学)

衛 東 (一九八五・七) 『こと』と『の』について 『日本語教
育研究論纂 在中華人民共和国日本語研修センター紀要』
第四号 pp.59-67 (国際交流基金在中華人民共和国日本語研
修センター)

レー・バン・ター (一九八六・五) 『状況の連体節』の構文—接続助
詞の形成における『の』の役割— 『言語学論叢』第五号
pp.58-71/72 (筑波大学)

備前 徹 (一九八六・一〇) 『名詞述語文における『の』と『V』』
『東海大学紀要 留学生教育センター』第七号 pp.39-50

田野村忠温 (一九八六・一一) 『命題指定の『の』の用法と機能』 諸
説の検討— 『言語学研究』第五号 pp.85-120

高橋 順一 (一九八八・三) 『テキスト形成的機能について—分裂文
と擬分裂文の場合—』 『旭川工業高等専門学校研究報文』
第二十五号 pp.195-205

濱田 留美 (一九八八・三) 『わけ』『の』『もの』 『国際学友会日本
語学校紀要』第十二号 pp.76-84 (国際学友会日本語学校)

レー・バン・ター (一九八八・六) 『の』による文理め込みの構造と
表現の機能 日本語研究叢書2『くろしお出版

近藤 泰弘 (一九八九・三) 『中古語の分裂文について』 『日本女子大

斎藤 直子 (一九九〇・六)「準体助詞『の』について—『の』の省

略されるものとされないもの—」『宇大国語論究』第二号

pp.1-17 (宇都宮大学)

橋本 修 (一九九〇・一一)「補文標識『の』『い』の分布に関わ

る意味規則」『国語学』第百六十三集 pp.112-101

衛 東 (一九九一・一)「日本語形式名詞『の』の意味的用法」『国

文学論集』第二十四号 pp.143-154 (上智大学)

伊藤 晃 (一九九二・一)「日本語の分裂文の談話における機能」『さ

わらび』第一号 pp.1-22 (神戸市外国語大学)

川本 裕未 (一九九二・三)「情報のなわ張り理論による分裂文分析

について」『表現研究』第五十五号 pp.36-40 (表現学会)

近藤 泰弘 (一九九二・三)「上代・中古語の形状性準体構造をめぐ

つ」『小林芳規博士退官記念 国語学論集』pp.259-274

汲古書院

日高 吉隆 (一九九二・三)『の』『い』と』の選択に関わる制約』『創

価大学別科紀要』第六号 pp.23-30 (創価大学)

伊藤 晃 (一九九三・一)「分裂文と『のだ』文—課題設定のあり

方と構文の文脈依存性—」『やわらび』第二号 pp.2-10 (神

戸市外国語大学)

原田 登美・小谷 博泰 (一九九三・三)「準体助詞『の』をめぐる

て」『甲南大学紀要文学編』第八十七号 pp.1-36 (甲南大学)

安藤 裕介 (一九九三・六)「分裂文についての一考察」『久留米大学

田吹 昌俊 (一九九三・八)「モノ・コト視点からの『の』節の分析

—通信によるニュース記事の分析から—」福岡言語学研究

会編『言語学からの眺望 福岡言語学研究会20周年記念

論文集』pp.375-389 九州大学出版会

佐治 圭三 (一九九三・一〇)「特集『の』の言語学——『の』の本

質—『い』と『も』との対比から—」『日本語学』第十二

巻第十一号 pp.4-14 明治書院

黄 朝茂 (一九九三・*)「形式名詞『の』の文法機能について」『台

湾日本語文学報』第五号 pp.9-36 (中華民国日本語文学会)

山西 正子 (一九九四・二)「準体助詞『の』の使用状況」『淑徳短期

大学研究紀要』第三十三号 pp.265-279 (淑徳短期大学)

坪根由香里 (一九九四・三)『の』『い』『の』に関する考察—『の

だ』を中心に—」『南山日本語教育』第一号 pp.99-128 (南

山大学)

石神 照雄 (一九九四・三)「連体の構造(4) 形式名詞『の』による

転換連体」『信州大学教養部紀要 人文科学』第二十八号

pp.53-60 (信州大学)

橋本 修 (一九九四・三)『の』補文の統語的・意味的性質』『文

芸言語研究 言語篇』第二十五号 pp.153-166 (筑波大学)

三原 健一 (一九九四・七)「いわゆる主要部内在型関係節について」

『日本語学』第十三巻第八号 pp.80-92

坪本 篤朗 (一九九四・七)「副詞句(節)と副詞的付加詞—いわゆる

『主要部内在型関係節』について―『人文論集 静岡大
学人文学部社会学科・言語文化学科研究報告』第四十五卷
第一号 pp.155-175 (静岡大学)

三原 健一 (一九九四・一一) 『日本語の統語構造―生成文法理論と
その応用―』松柏社

陳 訪沢 (一九九四・一一) 『日本語の『の』による名詞節主題文
の構造』『国語国文研究』第九十七号 pp.63-50 (北海道大
学)

松井 秀親 (一九九四・一一) 『ハ』と『の』 二つの名詞化標識
について』『山形県立米沢女子短期大学紀要』第二十九号
pp.41-52 (山形県立米沢女子短期大学)

天野みどり (一九九五・一) 『が』による倒置指定文―『特におすす
めなのがこれです』という文について―』『人文科学研究』
第八十八号 pp.1-21 (新潟大学)

渡辺ゆかり (一九九五・一) 『命令を表わす動詞の選択するラ格補文
と『の』』『ハ』』『ニ』の科学 (Studia Linguistica)』第
七号 pp.89-103 (名古屋大学)

伊藤 晃 (一九九五・二) 『分裂文・疑問文・ウナギ文』『さわらび』
第四号 pp.9-21 (神戸市外国語大学)

坪本 篤朗 (一九九五・三) 『文連結と認知図式―いわゆる主要部内
在型関係節とその解釈―』『日本語学』第十四卷第三号
pp.79-91

榎山 洋介 (一九九五・四) 『代用語の『の』と『もの』』長谷川欣佑

教授選歴記念論文集刊行会 (編) 『長谷川欣佑教授選歴記

念論文集 (Essays in Linguistics and Philology Presented to

Professor Kinsuke Hasegawa on the Occasion of his Sixtieth

Birthday February 8, 1995)』pp.165-173 研究社

砂川有里子 (一九九五・五) 『日本語における分裂文の機能と語順の

原理―仁田 義雄編『複文の研究 下』pp.353-388 へろ

しお出版

天野みどり (一九九五・一一) 『後項焦点の『AがBだ』文』『人文科
学研究』第八十九号 pp.1-24 (新潟大学)

大島 資生 (一九九六・三) 『補文構造にあらわれる『ハ』と『の』
について』『東京大学留学生センター紀要』第六号 pp.47-69
渡辺ゆかり (一九九六・六) 『ラ格補文標識』の『こと』の使い分
け―仮説設定のプロセスとその意義―』『三重大学日本語

学文学』第七号 pp.31-42

小松 光三 (一九九六・一一) 『いわゆる準体助詞『の』の表現機能』
愛媛大学人文学会 編刊『愛媛大学人文学会創立二十周年
記念論集 pp.203-216 (愛媛大学)

渋谷 倫子 (一九九六・一一) 『もう一つの現実を表す『の』』『日本
語教育』第九十一号 pp.25-36 (日本語教育学会)

岩城加代子 (一九九七・一) 『誤用について 3 文の構成における不
足成分―助詞『の』―』『天理大学別科日本語課程紀要』
第七号 pp.34-50 (天理大学)

宋 承姫 (一九九七・三) 『韓国語の文末における『kes』に関する

一考察—命令法の『S』『もの』『い』との対照言語学的
観点から—』『教育学研究紀要 第二部』第四十二号

pp.495-500 (中国四国教育学会)

渡辺ゆかり (一九九七・三)『期待する』が選択する『の』『い』』

『名古屋大学人文科学研究所』第二十六号 pp.101-114 名古屋

大学大学院文学研究科

陳 訪澤 (一九九七・六)『日本語の分裂文とウナギ文の形成に

つづ』『世界の日本語教育 日本語教育論集』第七号

pp.251-267 (国際交流基金日本語国際センター)

近藤 泰弘 (一九九七・九)『の』『い』による名詞節の性質—能

格性の観点から—』『国語学』第百九十集 pp.142-132 国語

学会

渡辺ゆかり (一九九七・*)『記憶』動詞と『S』『い』』『名古屋

大学言語文化部言語文化論集』第十九巻第一号 pp.255-271

(名古屋大学)

井島 正博 (一九九八・三)『名詞述語文の多層的分析』『成蹊大学文

学部紀要』第二十三号 pp.1-53

橋本 修 (一九九八・三)『補文標識』『の』の統一的理解をめぐつ

て』筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究

組織 編刊『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロ

ジェクト研究報告書1平成9年度』第二巻 pp.367-373

(筑波大学)

菅野 高志 (一九九八・三)『S』『い』『い』の使い分けに つづ

一考察—ヲ格名詞節の場合—』『日本語と日本語教育』第
二十六号 pp.73-83 (慶応義塾大学)

野田 時寛 (一九九八・九)『複文研究メモ(2)—日本語の分裂文—』『人

文研紀要』第三十一号 pp.199-218 (中央大学)

橋本 修 (一九九八・一〇)『伝える』『述べる』と『い』補文

・『の』補文の分布』『筑波日本語研究』第三号 pp.1-8 (筑

波大学)

坪本 篤朗 (一九九九・一)『特集 おもしろい日本語—モノとコトか

ら見た文法 主要部内在型関係節とト書き連鎖—』『日本

語学』第十八巻第一号 pp.26-40

菅野 高志 (一九九九・三)『S』『い』『い』の使い分け—『難し』

が選択する主格名詞節—』『日本語と日本語教育』第二十

七号 pp.101-112 (慶応義塾大学)

佐藤 雄一 (一九九九・三)『ガ分裂文をめぐつて』『千葉大学留学生

センター紀要』第五号 pp.1-12

渡邊ゆかり (一九九九・七)『ヲ格補文の「叙実性」と『の』』『広島

大学院大学日本文学』第九号 pp.1-21 (広島大学院大学)

大嶋 秀樹・加藤 久雄 (一九九九・一一)『補文標識』『の』『い』

の名詞性とその選択について』『奈良教育大学紀要人文・

社会科学』第四十八巻第一号 pp.1-9 (奈良教育大学)

加藤 雅啓 (一九九九・一一)『報道文におけるガ分裂文について』

『International Journal of Pragmatics (IJPr)』第九号 pp.1-18

Pragmatics Association of Japan (PAJ) 編 Takao Printing Inc.

- 田上 稔 (一九九・一二) 「準体助詞『の』に(こ)て」『女子大國文』第百二十六号 pp.74-89 (京都女子大学)
- 近藤 泰弘 (二〇〇〇・一一) 『日本語記述文法の理論』ひこじ書房
- 堀川 智也 (二〇〇〇・一一) 「こわゆる主要部内在型関係節の名詞性と副詞性」山田 進・菊地 康人・杉山 洋介編『日本語意味と文法の風景―国広哲弥教授古稀記念論文集―』pp.317-326 ひこじ書房
- 宋 承姫 (二〇〇〇・一一) 「文法化の観点から見た日韓両言語の文末表現の一考察―『や』『い』『え』と『て』を中心に―』『日本文化學報』第八号 pp.83-100 韓国日本文化學會
- 伊藤 晃 (二〇〇〇・三) 『は』分裂文と『が』分裂文の談話における機能』菅山 謙正編『現代言語学の射程』pp.335-354 英宝社
- 柏木 成章 (二〇〇〇・三) 『S』と『V』』『別科論集』第二号 pp.69-79 (大東文化大学)
- 田中 寛 (二〇〇〇・三) 『V』と『S』節を受ける形容詞述語文』『語学教育研究論叢』第十七号 pp.113-137 (大東文化大学)
- 陳 訪澤 (二〇〇〇・一一) 「日本語の分裂文成立から見た格成分の種類」『日本文学研究』第九号 pp.1-15 (北京日本文学研究會) 世界知识出版社
- 吉村 紀子 (二〇〇一・一一) 「分裂文を八代方言からさぐる」『いとばと文化』第四号 pp.67-84 (静岡県立大学)
- 橋本 修 (二〇〇一・三) 「補文標識『の』の統一的理解をめぐる問題点」中右実教授還暦記念論文集編集委員会(編)『意味と形のインターフェース 中右実教授還暦記念論文集』pp.487-497 ひこじ出版
- 梶井 恵子 (二〇〇一・三) 「名詞節化辞としての形式名詞『こと』・助詞『の』の分析―英語との比較を通して―』『立教大学日本語研究』第八号 pp.2-18 (立教大学)
- 橋本 知子・村杉 恵子 (二〇〇一・六) 『の』であらわされる文法範疇の獲得 実証的研究』『アカデミア 文学・語学編』第七十号 pp.55-87 (南山大学)
- 朴 善述 (二〇〇一・一一) 「準体法を用いた表現と準体助詞『の』を用いた表現―二葉亭四迷『浮雲』を資料として―』『日本文化學報』第十二号 pp.31-47 (韓国日本文化學會)
- 長谷川信子 (二〇〇一・三) 「主要部内在型関係節―DP 分析―」『Scientific Approaches to Language (神田外語大学言語科学センター紀要)』第一号 pp.1-33
- 金 銀珠 (二〇〇一・四) 『S』の論理に(こ)て―連体(修飾節)と存在概念との関わりから― 田島 毓堂・釘貫 亨編『名古屋大学日本語研究室 過去・現在・未来』pp.21-34 (名古屋大学)
- 小原 京子 (二〇〇一・一〇) 「構文理論から見た主要部内在型関係節の意味と機能」大堀 壽夫編『認知言語学2 カテゴリ一化 シリーズ言語科学3』pp.277-295 東京大学出版會
- 坪本 篤朗 (二〇〇三・一一) 「再び、主要部内在型関係節構文―『分

- 離』と『統合』の間―『ことばと文化』第六号 pp.27-44
 (静岡県立大学)
- 阿部 忍 (二〇〇三・三)「補文標識『の』『こと』に関する若干の考察」『山手日文論攷』第二十三号 pp.35-46 (神戸山手女子短期大学)
- 朴 善述 (二〇〇三・三)「準体法を用いた表現と準体助詞『の』を用いた表現と―葉亭四迷『浮雲』を資料として―」『国学院大学大学院紀要 文学研究科』第三十四号 pp.263-286 (国学院大学)
- 坪本 篤朗 (二〇〇四・二)「『提示』と『叙述』の形式と意味―there 構文と主要部内在型関係節構文―」『ことばと文化』第七号 pp.27-53 (静岡県立大学)
- 吉村 紀子・仁科 明 (二〇〇四・二)「分裂文の意味と構造―古代語と九州方言の接点―」『ことばと文化』第七号 pp.55-72 (静岡県立大学)
- 熊本 千明 (二〇〇四・三)「分裂文の特徴について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』第八巻第二号 pp.95-104
- 尾野 治彦 (二〇〇四・四)「小説における補文標識『の』『こと』の使い分けについて―語り手の心的態度の観点から―」『日本語科学』第十五号 pp.45-68 (国立国語研究所)
- 山田 誠 (二〇〇四・七)「焦点移動としてのかき混ぜと分裂文」佐藤 滋・堀江 薫・中村 涉 編『対照言語学の新展開 ひつじ研究叢書 言語編 34』pp.187-208 (ひつじ書房)
- 坪本 篤朗 (二〇〇五・二)「付加語句の中の主要部内在型関係節」『ことばと文化』第八号 pp.31-54 (静岡県立大学)
- 伊藤 徳文 (二〇〇五・三)「指定文・分裂文の意味論・語用論的研究」『文学論叢』第二十二号 pp.1-31 (徳島文理大学)
- 仁科 明・吉村 紀子 (二〇〇五・三)「補文標識の出現―『の』の歴史的变化―」『国際関係・比較文化研究』第三巻第二号 pp.75-89 (静岡県立大学)
- 黒沢 晶子 (二〇〇五・九)「ロトか、モノか―『の』名詞化節の表す―」『BATJ Journal』第六号 pp.44-56 The British Association for Teaching Japanese as a Foreign Language
- 清水まさ子 (二〇〇六・二)「主語の交替をめぐる分裂文／非限定的連体節の役割」『国文目白』第四十五号 pp.28-39 (日本女子大学)
- 信太 知子 (二〇〇六・三)「衰退期の連体形準体法と準体助詞『の』句構造の観点から」『神女大国文』第十七号 pp.29-44 (神戸女子大学)
- 川越菜穂子 (二〇〇六・二)「補文標識『の』『こと』『もの』の使い分けについて―韓国語を母語とする日本語学習者の立場から―」『帝塚山学院大学人間文化学部研究年報』第八号 pp.29-44 (帝塚山学院大学)
- 森田美恵子 (二〇〇六・二)「埋め込み文をつくる『の』に関する研究」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第二十八号 pp.36-50 (龍谷大学)

山下 好孝 (二〇〇六・一二) 『S』と『T』をめぐる一音声学

的分析からの考察―『北海道大学留学生センター紀要』

第十号 pp.135-147

秋本 瞳 (二〇〇七・三) 「命題を名詞化する『S』『T』の使用

における文体的要因」『言語と文明』第五号 pp.61-79 (麗

沢大学)

郡司 隆男 (二〇〇七・三) 「日本語の分裂文と談話表示意味論」『ト

ークス TALKS』第十号 pp.17-32 (神戸松蔭女子学院大

学・神戸松蔭女子学院短期大学部)

団迫 雅彦・水本 豪 (二〇〇七・七) 「研究ノート」幼児の分裂文

の理解について』『九州大学言語学論集』第二十八号

pp.107-120

渡辺ゆかり (二〇〇七・七) 「用言後接型準体助詞『の』の成立背景

と統語的使用領域の拡張について」『広島女学院大学日本

文学』第十七号 pp.1-20 (広島女学院大学)

砂川有里子 (二〇〇七・九) 「分裂文の文法と機能」『日本語文法』第

七巻第二号 pp.20-36

長谷部陽一郎 (二〇〇七・九) 「英語と日本語の分裂文」認知文法に

よる対照研究―山梨 正明・辻 幸夫・西村 義樹・坪

井 栄治郎 編『認知言語学論考』第六号 pp.157-198 ひこ

じ書房

ジョンソン、由紀 (二〇〇七・一〇) 「形式名詞の機能―『S』『T』

の本質をめぐる一」南 雅彦 編『言語学と日本語教育

5 New Directions in Applied Linguistics of Japanese』

pp.19-33 くろしお出版

坪本 篤朗 (二〇〇七・一一) 「ト書き連鎖、主要部内在型関係節お

よび後位修飾―構文の〈身体性〉と〈自己同一性〉」『As

Linguistica ― Linguistic Studies of Shizuoka』第十四号

pp.42-72 (中部言語学会)

有元 将剛 (二〇〇八・一) 「日本語の分裂文と照応形の束縛」『アカ

デミア 文学・語学編』第八十三号 pp.35-69 (南山大学)

佐藤 佑 (二〇〇八・三) 「現代日本語の動詞性名詞と『の』『と』

による名詞化について」『日本研究教育年報』第十二号

pp.21-45 (東京外国語大学)

森 純子 (二〇〇八・三) 「会話分析を通しての『分裂文』再考察

―『私事語り』導入の『の』は『節』」『社会言語科学

特集：相互行為における言語使用―会話データを用了研

究』第十巻第二号 pp.29-41 (社会言語科学会)

山田 昌史 (二〇〇八・三) 『S』の特性と統語構造』『Scientific

Approaches to Language 神田外語大学言語科学研究センタ

―紀要』第七号 pp.151-179

加藤 雅啓 (二〇〇九・二) 「ガ分裂文の談話機能」『上越教育大学研

究紀要』第二十八号 pp.119-130

Kobayashi, Shigeyuki (二〇〇九・三) 「The developing of the head-internal

relative clause constructions in old Japanese ― Reanalysis of

the syntactic position of the case particle “no”」『聖学院大

学論叢 聖学院大学創立20周年記念論文集 人文学部編』
第二十一巻第二号 pp.237-248

要 外国語・外国文学編』第三十五巻第一号 pp.96-107
劉 洋 (二〇一・七)「ハ分裂文『AのハBダ』の使用条件に
ついて」『一橋大学国際教育センター紀要』第二号 pp.97-109

天野みどり (二〇一〇・三)「主要部内在型関係節と接続助詞的な
ヲ」『和光大学表現学部紀要』第十号 pp.5-19 (天野 (二
〇一・一〇)所収)

天野みどり (二〇一・一〇)『日本語構文の意味と類推拡張』笠間
書院

井島 正博 (二〇一〇・三)「ノダ文の機能と構造」『日本語学論集』
第六号 pp.75-117

坪本 篤朗 (二〇一・一)「いわゆる主要部内在型関係節の形式
と意味と語用論—(もS)と(こと)の言語学—」『Ars
Linguistica—Linguistic Studies of Shizuoka—』第十八号
pp.95-111 (中部言語学会)

西山 佑司 (二〇一〇・三)「擬似分裂文の意味解釈について」『明海
大学外国語学部論集』第二十二号 pp.77-87

水本 豪 (二〇一・一)「幼児の言語理解における文脈情報の
利用可能性とワーキングメモリ容量のかかわり—分裂文の
理解から—」『九州大学言語学論集 松田伊作名誉教授追
悼号』第三十二号 pp.151-165

橋本 修 (二〇一〇・七)「(書評)渡邊ゆかり著『文補語標識』」
と『S』の意味的相違に関する研究』(溪水社 2008)、『日
本語の研究』第六巻第三号 pp.138-143

井島 正博 (二〇一・三)「モノダ・コトダ・ワケダ文の構造と機
能」『日本語学論集』第八号 pp.95-157 (東京大学)

水本 豪 (二〇一〇・八)「幼児の文理解に及ぼすワーキングメモ
リ容量の影響—関係節文・分裂文の理解からの検討—」『九
州大学言語学論集』第三十一号 pp.131-143

井島 正博 (二〇一・一)「文末ノダ文の構造と機能」『国語と国
文学』第八十九巻第十一号 pp.101-113

秋本 瞳 (二〇一・三)「節を名詞化する『の』と』の用例分
析」『言語と文明』第九号 pp.125-141 (麗沢大学)

中村 嗣郎 (二〇一・三)「日本語分裂文の習得」『コミュニケーシ
ョン科学』第三十七号 pp.81-98 (東京経済大学)

井島 正博 (二〇一・三)「主節における非文末ノダ文の機能と構
造」『日本語学論集』第七号 pp.70-103 (東京大学)

井島 正博 (二〇一・三)「人称表現としてのノダ文」『学芸国語国
文学』第四十五号 pp.7-20 (東京学芸大学)

熊井 浩子 (二〇一・三)「分裂文AナノハBダについての考察」『静
岡大学国際交流センター紀要』第五号 pp.1-19

野村 益寛 (二〇一・三)「日本語主要部内在型関係節の時制解釈」
『言語研究』第百四十三号 pp.1-28

Sakaguchi, Mari (二〇一・三)「A note on the focus movement analysis
of Japanese cleft sentences」『ノートルダム清心女子大学紀

要 外国語・外国文学編』第三十五巻第一号 pp.96-107
劉 洋 (二〇一・七)「ハ分裂文『AのハBダ』の使用条件に
ついて」『一橋大学国際教育センター紀要』第二号 pp.97-109

高野 祐二 (二〇一三・一) 「多重分裂文と束縛の移動分析」遠藤

喜雄 編『世界に向けた日本語研究』pp.45-68 開拓社

水本 豪 (二〇一六・三) 「幼児の分裂文の復唱からみたワーキン

坪本 篤朗 (二〇一四・一) 「いわゆる主要部内在型関係節の形式と

意味と語用論—その成立条件を再考する—」益岡 隆志・

グメモリ保持負荷の影響』『九州大学言語学論集』第三十
六号 pp.271-278

大島 資生・橋本 修・堀江 薫・前田 直子・丸山 岳

野村 益寛 (二〇一六・五) 「事象統合からみた主要部内在型関係節

彦 編『日本語複文構文の研究』pp.52-84 ひつじ書房

構文—『関連性条件』再考—」藤田 耕司・西村 義樹

坪本 篤朗 (二〇一四・二) 「主要部内在型関係節構文とパラドクス

—『永久に平行線を辿る』議論の根元—」『ことばと文化』

編『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文
法・認知言語学と日本語学—』pp.186-211 開拓社

第十七号 pp.55-70 (静岡県立大学)

山村 仁朗 (二〇一四・二) 「準体助詞『の』の選択条件 —『は』と

(い)じま まさひろ 人文社会系研究科 教授)

との置き換え—」『歴史文化社会論講座紀要』第十一号

pp.37-42 (京都大学)

天野みどり (二〇一四・三) 「サマ主格変遷構文の意味と類推拡張—

『のが』型の主要部内在型関係節文と接続助詞的な『のが』

文—」『和光大学表現学部紀要』第十四号 pp.27-40

井島 正博 (二〇一四・三) 「条件節におけるノダの構造と機能」『日

本語学論集』第十号 pp.88-106 (東京大学)

Nakamura, Masanori (二〇一四・三) 「On cleft in Japanese」『人文科学

年報』第四十四号 pp.143-170 (専修大学)

坪本 篤朗 (二〇一五・三) 「主要部内在型関係節とパラドクス—(波)

と(粒子)の言語学—」深田 智・西田 光一・田村 敏

と(粒子)の言語学—」深田 智・西田 光一・田村 敏

編『言語研究の視座』pp.427-445 開拓社

佐々木 淳 (二〇一六・三) 「準体助詞『の』の構文スキーマに関する

一考察』『比治山大学紀要』第二十二号 pp.121-126

編『言語研究の視座』pp.427-445 開拓社

佐々木 淳 (二〇一六・三) 「準体助詞『の』の構文スキーマに関する

一考察』『比治山大学紀要』第二十二号 pp.121-126